
最後の輪廻

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後の輪廻

【Nコード】

N6331Y

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

誰かから私は逃げていた。でも、何も覚えていない。気がつくときは記憶を失っていた。誰から逃げていたの？そして、目の前に現れた男の人は、いったい誰？！サスペンスのような、SFのような、恋愛小説、お楽しみください。

第1話 記憶喪失

私は逃げていた。オフィスビルの立ち並ぶ夜の街を。
必死で逃げていた…。

殺される。

逃げないと…。

早く、ここから逃げないと…。

必死で私は走っていた。

誰か、助けて！でも、誰に助けを求めていいかもわからないまま、
ただひたすら走っていた。

夜の街は静かだった。辺りには私の足音しか聞こえない。休日の
オフィス街の夜。どのビルも明かりが消え、閑散としている。

はあ。はあ。

息が切れ、足はパンパンだった。

もう走れない。そんな余力もない。喉はカラカラで、心臓はバク
バクだ。

はあ。はあ。

無意識に私は上着のポケットに手を入れた。そこには、なぜか飴
玉が入っていた。

私は飴の包みを震える手でどうにかあけ、飴を口に放り込んだ。

それからまた、歩き出した。

一步、また一步。壁に手を当て、どうにか前に進んだ。

足の裏がじんじんとしびれ、もう一步も歩けないくらいになって

いる。それでも私は歩いた。

はあ。苦しい。でも止まれない。きつと追って来る。私を殺すまで追って来る…。

私は気がつくど、高層マンションが立ち並ぶ街の中にいた。街燈がいくつもあるが、外には誰の姿も見当たらなかった。

腕時計を見ると、9時を過ぎていた。ここの住人達はすでに、みんな家の中に入っているのか。

カッソ…。カッソ…。

私の靴の音がやたらと当たりに響くので、私はそこで靴を脱いだ。パンプスを拾い上げ、上着のポケットに押し込み、また私は歩き出した。

高層マンションを見上げた。いったい、何階まであるのだろうか。どのマンションもものすごく高い。

見上げたマンションの上に夜空が広がっているが、ただただ真黒なだけで、星も月も出ていなかった。

あたりはすごく静かだった。人の声も、車の音も、なにも聞こえない。

夜は一気に冷え込むのか、吐く息が白かった。

風は全く吹いていなくて、ただその辺りを包む空気がやたらと冷たく感じた。

カッソ…。

その時、静けさの中に靴の音が鳴り響いた。

ドキ！誰かいる。

パンプスの音ではなく、男物の靴の音だ。それも聞き覚えがある。私はゾクツと寒気を感じた。あの男だ！

また私は走り出した。

必死で走り、すぐ近くの高層マンションの門をくぐった。

エントランスの自動ドアが開いてくれるかどうか、ものすごく不安だった。

ピカピカに磨かれた大きなガラスの自動ドア。その前に立つと、自動ドアはスウツと静かな音を立て開いてくれた。

良かった。胸をなでおろし、マンションのロビーに入った。広々としたロビーは大理石できていた。床は私の影をしっかりと映すくらい、綺麗に磨かれている。

煌々と明かりのついたロビーには、黒い革張りのソファアが置かれていた。ああ、座りたい。でも、休んでなんていられない。

ロビーの奥へと足を進めると、管理人室があった。だがその中は真っ暗だった。

私はロビーからマンションの廊下へと、必死で向かった。

はあ、はあ…。

息が切れる。足の裏が痛い。そして大理石の床は冷たかった。

それでも必死で私は足を動かした。

その時、靴が私の上着のポケットから落っこちた。慌てて拾おうとしたが、エントランスの前を人影が動いたので、私は慌てて身を

隠した。

ドキン。ドキン。

お願い。こっちにこないで！

人影はエントランスの前から消えた。

良かった！気づかれずに済んだ。

また私は歩き出した。

まっすぐに続くマンションの廊下を、ただひたすら前に進んだ。

廊下は電気がついていて明るかった。だが、どの部屋も明かりが漏れている部屋はなく、真っ暗だ。

そのうえ、あたりは静まり返っていた。聞こえてくるのは、私の「はあ、はあ」という息の漏れる音だけだ。

「あ……」

私は一つだけ、微かに窓から漏れる明かりを見つけた。あそこに誰かがいるかもしれない。

助けを求められるかもしれないと、ひたすら祈る気持ちで私はその部屋へと必死で歩いて行った。

助けを求めたら、警察に連絡してくれるかもしれない。そしてあいつを捕まえてもらって……。

でも、あいつって、誰？

それに、なんで私はここにいるの？

そして、ここはいったいどこなの？

…私は、いつたい、誰なの……？。

ドアのチャイムを鳴らそうとしてから、私の指は止まった。殺される。逃げないと殺される。だけど、いったい誰から私は逃げているの？

どうして？なんで覚えていないの？

何も、何も私は覚えていない！いったい、どうして？！

ピンポン…。震える指でチャイムを押した。だけど、返答はなかった。

「すみません。誰かいませんか？」

私はドアを静かに叩いた。あんまり大きな音を立てて、あいつに聞こえたらここにいるのがばれてしまう。

だけど、あいつって誰なの？なんで私は追われていて、どうして何も覚えていないの？

誰も出てくる気配がなくて、私はそっとドアノブを掴んでみた。ガチャリ。ドアノブが動いた。鍵はかかっていなかった。

そっとドアを開け、中を覗いた。

玄関の床はやはり大理石でできている。そこには一つも靴がなく、中はしんと静まり返っている。だけど、電気だけが煌々とついている。

「誰かいませんか？」

小声で聞いた。だが、やはり返答はなかった。

ゾク…。誰もいないんだ。ここ、無人なんだ。

背筋がゾツとしてきて、私はドアを閉めた。

このマンション、そういえばすごく綺麗だ。まだ建ったばかりのマンションかもしれない。だとしたら、ここには住人はいないのかもしれない。

私はまた廊下を歩いた。いったい、これからどうしたらいいのだろう。

マンションの一階の奥まで歩き、行き止まりで私は止まった。

ここから出たら、またあいつに出くわしてしまうかもしれない。

ここにいても、いつか見つかってしまうかもしれない。

だけど、闇雲に歩き回っているよりもましだ。

さっきの部屋に戻るのか。あそこならドアが開いていた。中に入って鍵をかけ、電気を消して静かにしていたら、見つからずにすむんじゃないのか。

シュー…。

微かにエントランスの自動ドアが開いた音がした。

ドキン。まさか、あいつ？

カッーン。カッーン。

男物の靴音が廊下に響いた。

あいつだ。こっちに来る！

ああ。あれだ。ポケットから落ちた私のパンプス。あれを見つけってしまったんだ。取りに戻ればよかった。だが、それも後の祭りだ。

私はその場から、影になっている廊下の溝へと移動した。もう隠

れるところはそこしかなかった。

ドキン。ドキン。ドキン。

心臓がどンドン、早く鳴りだした。

カッーン…。

カッーン…。

どンドン、足音は大きくなっていく。

ああ…。なんで私は追われているんだろう。いったい、相手はどんなやつなんだろう。

なんで何も覚えていないんだろう。覚えているのは、ただ追われているという恐怖感だけだ。

私はもつと奥へと身を隠した。廊下は明るかったが、そのくぼみは影になっていて、じっとしていたら、見つからないかもしれないかもしれない。つた。

ゴツ…。

何かが後ろの壁に当たった。私のスカートのポケットの中に何かがある。私は音をたてないように、静かにポケットからそれを出した。

ナイフ？折り返み式の果物ナイフだ。なんで、こんなものが。

用心のために持っていたのだろうか。私はナイフを開き、両手でギョツと握った。手はぶるぶると震え、唇までが震えだした。

寒かった。歯がガタガタ言うのだけは、必死で押さえた。

だが、手が震えるのは寒さだけではなかった。殺される前に、これで相手を刺そう。そう思うと、怖くて手が震えてくるのだ。

こんなナイフがいったい、何の役に立つんだろうか。わからないでも、刺して逃げだすことはできるかもしれない。

だけど、これ以上私は走れるのだろうか。足の裏は擦り剥けているし、寒さでかじかんでもいる。

カッーン！

カッーン！

足音がどんどん近づいてくる。

はあ……。恐怖で息が漏れた。

いけない！吐いた息が私を隠していた闇の中で、白くうずまいている。

「誰？」

男の声がした。

「誰がいるの？」

カッン。カッン。

足音が早くなり、どんどんこっちに近づいてくる。

ガタガタ。ナイフを持っている手が震える。

このまま勢いよく飛び出して、心臓めがけてナイフで刺そうか。

だけど、足が動かない。しゃがみこんだまましびれてしまい、足がどうにも動かない。

「そこに誰がいるの？」

来た！もう逃げられない！

「君、この靴の持ち主？」
男の手には私のパンプスがあった。

「どうしてこんなところにいるの？隠れているの？」
え？

「誰かに追われているの？」
……。私を殺しに来たやつじゃないの？

「この靴、君のじゃないの？」
私の……」

「立てる？」
その人は私の前にしゃがんだ。私は警戒して、後ろの壁にひっついた。

「……それ、危ないよ」
私の手に持っているナイフを見て、その人はそう言った。

ガタガタ……。私の手はまだ震えていた。
「わ、私を追って来たんじゃないの？」

「僕？いや、違うよ」
「……じゃ、じゃあ、あなた誰？」
「……君は？」

「私は……」
覚えていない。まったく、覚えていない。

この人の顔も覚えていない。でも、なんでだからわからないけど、この瞳は覚えがある。なぜだか、懐かしくて、あったかい優しい瞳だ。

「はい。靴、履いたほうがいいよ」

「…あ」

両手は固まり、ナイフをなかなか離せないでいると、その人が私の指からナイフを取ってくれた。

「危ないから閉まっておくね」

ナイフを折り畳み、その人は自分のポケットにナイフをしまった。それから、私の両腕をつかんで、立たせてくれた。

ふらふらしながら私は立ち上がり、どうにか靴を履いた。

「大丈夫？歩けそう？」

こっくりと、私はうなづいた。

「寒そうだね。これ、着たらいいよ」

その人は自分の上着を脱いで、私の肩にかけてくれた。そして私の肩を抱いて、ゆっくりと歩き出した。

「あなた、ここに住んでいる人ですか？」

「いや。違つよ」

「…じゃ、じゃあ、ここってどこか知っていますか？」

「…さあ」

え？

「それが、まったくわからないんだ」

男の人はまっすぐ前を向いて答えた。

「ここがどこか？」

「うん」

カッーン。カッーン。

その人の足音と私の足音が、廊下に鳴り響いた。他には何の音もないから、靴音だけが響き渡ってしまう。

「靴音を聞いて、あいつが来たらどうしよう」

「誰？」

「私を殺そうとした人……」

「殺しに？そんな危ない奴から逃げてたの？」

「……」

私は黙ってうなづいた。

「誰なの、そいつ」

「わからない」

「え？」

「わからないんです」

「何をして殺されそうになっているの？」

「それも、わからないの……」

その人は目を細めて私を見た。そして、下を向きたため息をついた。その人からも真っ白い息が漏れた。

「君もなんだね」

「え？」

「実は僕も……。記憶が全くない」

「え?!」

「なんでここに居るのかも。自分が誰なのかも……」

どういつことなの? 2人して記憶がないなんて……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6331y/>

最後の輪廻

2011年12月2日00時51分発行